

## 「読む脳」の育成と「デジタル化」 （メルマガ 2020年11月号）

秋も一段と深まり、降雪の便り、年賀状発売のニュースなどを耳にすると、今年一年の終わりを意識させられます。「流行語大賞」とはならないかもしれませんが、今年はコロナ禍にあって、「オンライン」「リモート」「デジタル」などの言葉を耳にすることが多くあり、仕事や学習面ではこれまで以上に環境の変化が生じたことが特徴的だと感じます。

学校休業や在宅勤務が続いた中で、オンライン授業やリモートワークなどが、一部ではすでに行われていたとはいえ、一気に取組が加速したように思います。対面でなくても会議ができますし、学校と子ども・家庭を繋ぐツールとしても活用されたようです。数々の利便性がありますが、教科書のデジタル化、すなわち電子書籍化するような議論もあることに、果たして今後、子どもたちの学びそのものがどうなるか、気になるところです。

そうした思いで出合ったのが、メアリアン・ウルフ氏の『デジタルで読む脳×紙の本で読む脳』（大田直子訳 2020年2月（株）インターシフト発行）でした。引用されている記述を含めて、印象的なところをご紹介します。

まず、読字能力は言語能力のように生来のものではなく（つまり遺伝子が備わっておらず）、私たち人間は読むことを学ぶ必要があること。そのために、「読む脳」を育てていかなければならず、読む脳が発達するほど「深い読み」ができるようになること。

紙の本には物理的実現性があり、心理的にも触覚的にも触れられることが深い読みにとって重要であること。深い読みによって、「背景知識」、批判的分析、推論、類推思考、共感などが高められること。そして、「読む脳」の育成には、思考と言語がともに育つ幼い頃の経験が重要であることが述べられています。併せて、こうした能力が備わっていないと、フェイクニュースなど裏付けのない情報の犠牲になりがちであるともありました。

一方、デジタル画面を読む場合では、細部の情報や記憶の順序付けなどが悪化することや、注意が散漫になり、分析力、批判力が育ちにくいとあります。

更には、言語力、思考力の衰えは、集団、社会、言語の均質化を招き、異なるすべてのもの、他者の排除につながる恐れがあり、民主社会への危機にもつながるともありました。

ただ、メアリアン・ウルフ氏は、「デジタル」を悪と見るのではなく、デジタルで読む脳も上手に育てることが必要であり、紙の本、デジタル双方の脳回路を育み「バイリテラシー脳」となっていくことが望ましいと述べています。

少し紹介が長くなりましたが、デジタル化については人間の脳の発達と重ねて、考察することが重要であることを学びました。現在、学校ではGIGAスクール構想が進められており、今後、タブレット端末が一人一台用意される環境も生まれると聞きます。この際に、「深い読み」について、学校と家庭とが考えを共有して、発達の段階に応じて、どのような体験・経験を積めるようにするかを真剣に考えなければいけないと感じました。

最後に、引用されていた印象深い言葉を一つ。「見事なテクノロジーを生み出した知性が、そのテクノロジーに脅かされるとしたら、それは残念なことだ。」